

---

# 禍食らい ~ Eating of the Disaster ~

髭伯爵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

禍食らい〜Eating of the Disaster

### 【Nコード】

N1201I

### 【作者名】

髭伯爵

### 【あらすじ】

右腕にあらゆる災いを食らう力を宿した少年・日斗神吾妻。平凡な毎日を過ごしていた彼が異世界に飛ばされたことから始まる、光と闇の物語。 「勇者だろっが魔王だろっが関係ねえ。全部食らってやるぜ!!!」

ブログ：「人助けなんてするもんじゃない」（前書き）

さあついにやってしまった新連載！ まだ完結していない作品ばかりだというのに何を考えているんだ俺！！  
実は何も考えていないだけだったり！！

・・・まあ久しぶりの作品投下ということですので大目に見てください。

プロローグ：「人助けなんてするもんじゃない」

「あーっーいー……。 しーぬーうー……。 」

ああ疲れる。 いい加減一休みしたい。 何だつてクソ暑い7月の炎天下に俺みたいな平和主義者な高校生が全力疾走なんぞしなけりゃならんだ。 こっちは学ラン着てるんだぞ。

……。 何でそんな暑苦しいモン着てるんだつて？ 後で教えるよ。

「待てやオラアア！！」

「逃がしやしねえぞ手前エエエ！！！！」

ああ、不良あいつらの所為だったか。 理解した。 やっぱ人助けなんて柄にもないことするんじゃないな。 まあ可愛い女の子だったし、いいか。

とりあえず、返答代わりに後ろから追いかけてくる社会不適合者予備軍に対して無言のまま中指をおっ立ててやる。 案の定、その鏡に映そうものならその鏡が壊れかねないほどの醜い顔を茹で上がった力二のように真っ赤にさせた不良どもが、怒鳴り声を上げだす。

ああやっぱりバカなんだなあいつ等。 そんな怒鳴りながら走ってたらずくにスタミナ切れになるだろうに。 あ、1人脱落した。 早過ぎだろ。

「ま、待てえええ……。 ！！！！」

「お願いだから止まってええ……。 ！！！！」

うわ、情けな。 あんだけ偉そうに追いかけてきていた不良たちが続々と脱落していく。 あー白目むいて気絶してる奴もいるなあ。

ハツハツハざまあみる。( 邪悪な笑み )  
因みに俺はまだまだ余裕だ。俺は昔から体力だけはあるんでな。  
たかだか1時間の全力疾走じゃ俺は止まらんぞ。  
・・・ハーン今俺のことを化け物だと思った奴は手え上げろ！。  
フルボッコにすつからー！。

「・・・っていつの間にか全滅してらっしやる。ホントに貧弱だねえ」

ふと、後ろから怒鳴り声が聞こえなくなっていることに気づき後ろを向くと、不良たちがいなくなっていた。 どうやら完全に撒いたようだ。

「ふいっ・・・。 あー疲れた」

立ち止まった俺は軽く伸びをすると、軽くストレッチをして両足の筋肉をほぐす。 やつとかないと明日酷いからな。

既に太陽は傾き始め、周囲は夕日によって赤く染められている。  
・・・うん思ったより撒くの時間掛かつちまったなあ・・・。  
俺持久力はあるても足速くないから仕方ないか。 うん。

とりあえず不良どもも撒いたし、家に帰るか。 ああでも、帰る途中でまたでくわしたら面倒臭いなあ・・・。 しばらく本屋で時間潰すか？

この後の予定について考えながら道を歩く。 考え事をしながら歩いていたため、途中で電柱にぶつかりそうになって慌てたが。

・・・ぶつかってはいいないぞ！ きちんと回避したからな！！  
ホントだぞ！！ ( 必死 )

「・・・ん？」

路地を曲がると、何かを探しているかのようにキョロキョロと視線を彷徨わせているショートカットの女の子を発見する。ていうか、あの人見覚えあるような……。

女の子はしばらくキョロキョロと辺りを見回していたが、曲がり角から現れた俺を見つけると、「あっ！」と言ってこちらへと駆け寄ってくる。

ああそうだ。俺がさっき不良どもから助けた人じゃん。でも何でこんなところに？

「ハア……ハア……。やっと見つかりました……。」

どうやら俺を探していたらしい。随分と走り回ったのか、額には汗が浮かんでいる。いかん、なんか色っぽいぞこやつ。

「……何か用か？」

平静を装いつつ声を掛けてみる。あー何かすっげえ不機嫌そうに言っちゃったよ。俺のアホ……。

案の定、女の子は俺が不機嫌だと勘違いしたらしい。勝手に慌て始めた。

「え、えと……あの……。」

ああ止めて止めて。そんな涙目で上目遣いになんてされたら俺の良心がズタズタになってしまうよ。君は何か？俺の心を抹殺しに来た暗殺者かね？

「すまん、不良どもの相手に疲れてたんだ。許せ」

これ以上は俺の精神に致命的なダメージとなってしまうので、俺

は頭を下げて謝罪する。

「い、いいえ！ 別に気にしてませんよ!!」

嘘だ!! あんな可愛らしい仕草で慌てた癖に!! . . . とは流石に言えないので、俺はとつと先を促すことにした。

「んじゃま、改めて聞くけど. . . . 俺に何か用か？」

「あ、ハイ！ えつとですね. . . .」

え、何で言い淀んだの？アレか？ また俺がぶつきらばうに言ったのが悪かったのか？ また俺やっちゃったのかー!!？

俺が1人勝手に自己嫌悪のループへ陥っていると、突然俺の右腕に微かな痛みが走る。普通の人なら、多少不思議に思った後すぐに忘れてしまうような微かな物だが、俺にとっては違う。

何故なら、右腕に不可思議な痛みが走るときは大抵トラブルが起きるからだ。

「!？」

「実は. . . . ってあの？ どうしたんですか？」

俺は困惑気味の女の子の声を無視して、かなり緊迫した様子で周囲を警戒する。 . . . 駄目だ！ 黒猫とカラスの大群が横切った!! 悪いフラグ立っちまった!!

「あの. . . . どうしたんですか？」

「いや、何か悪い予感がしてな. . . . 痛!？」

くそ！ 右腕の痛みがどんどん増していきやがる!!それだけの危機が迫ってくるってことか!？

俺は激痛の走った右腕を押さえ、さらに警戒心を強める。　これほどの痛みがくるといことは、最悪命に関わるぐらいの事態になるな……。

「あ、あの……」

「ん？」

「それって……イレスミ……ですか？」

「……あ」

良く見ると、左手で右腕を押さえた際に袖が捲くれ、俺の右腕に刻まれたく龍の入れ墨>が露わになってしまっている。　しまった、これがバレないためにこんなクソ暑い学ランなんて着てたのに……。

そう、俺の右腕には、手首の辺りから肩に至るまでの間に真つ黒な龍の入れ墨が刻まれているのだ。　この入れ墨、俺が物心着いた頃には既に刻まれていて、両親に聞くと生まれた直後にはもう刻まれていたらしい。

以来、俺の成長に合わせてサイズも大きくなったり、今のようにな俺に危険が迫っていることを知らせたりする。　正直、お払いに行こうかどうか迷ったことは何度かある。

最近では愛着も湧いているし、この入れ墨のお陰で助かったこともある。　それに、この入れ墨にはある特殊な力が宿っているのだ。今更手放すことはできそうにない。

「あー別にヤ　ザとかと関わりは持ってないから。　生まれた頃からあつたんだよ」

「そ、そうなんですか……」

恐怖ではなく驚愕に満ちた表情で固まっている女の子にそう言い訳する。……って何で俺は言い訳してるんだ？　何もしてないの



に……。

「（……やっぱりこの人が……。意外と早く見つかってよかったあ……）」

何故だ、何故目の前の女の子が何か呟きながら安堵してるのを見て何故か嫌な予感を感じてる俺がいるんだ！　ここは心ときめく瞬間じゃないのか！？

女の子は突然ニコリと笑うと、俺の左手を両手で握ってくる。・いや待て。他人の笑顔を見て寒気を覚えるとかマジでおかしいぞ。以前本屋で突然中年親父にセクハラ受けたとき以来だぞ。（

作者実体験）

……待てよ？　確か入れ墨が反応しだしたのはこの子会ってから……。まさか入れ墨が反応してるのはこの子か！？

俺は直感でこの子から離れた方がいいと思い、手を振り払おうとした。だが、それを実行する前に起きた異常事態に、俺は身動きできなくなる。

何と、俺の左手を握る女の子の両手から、目を開けていることができなくなる程の光が溢れ出てきたのだ。ぐわ！　眩しっ！！

「うわっ！！！」

咄嗟に右腕で視界を遮るが、光はどんどん広がっていく。俺の視界は目を閉じているにもかかわらず真っ白になっていき、まるでその光にかき消されるかのように俺の意識も薄れていく。

クソツタレ……。　やっぱガラにもないことなんてするもんじやなかった……。　ていうか人助けして酷い目に遭うとか何ソレ？　人間不信一歩手前です。

やがて意識が完全にブラックアウトしていく中、最後に俺が知覚できたのは、女の子が呟きだけだった。

「どづか、世界を救って下さい……。<担い手>さま……。」

ここから始まるのは、少年 日斗神吾妻ひとがみあすまが引き起こす物語。  
災厄を、病魔を、呪詛を、そして人の悪意を食らう禍食まがらいの少年が辿る、救世の物語である。

エピソード1：「食べても美味しくないですよ!」（前書き）

さあこれで書き溜め分は全部投下だあ!!

・・・いやネタは色々浮かんでるんだけどね？ 執筆しようとする  
とね・・・

主人公をなるべくチート臭くしないように心がけて執筆中  
・・・ダメだ、なんかチートっぽくなる・・・

エピソード1：「食べても美味しくないですよ！」

光の中に、一瞬だけ人影が見えた気がした。

「ん……うっ……」

何か、頭にゴツゴツしたものが当たってて痛い。 どうやら俺はどこかで横になっているらしい。 アレ……何だ夢才チなのか？

「……んお？」

まだぼんやりとしか見えない目をゴシゴシと擦りつつ上体を起こして……。

「……（。。。）」

周りに広がる余りにも予想外の光景に、目が点。 え？ 何コレ？

「……何故俺はこんなところにいるんだ……」

視界に入るのは、普段から濃い化粧をするオバハンの地肌のごとく荒れ果てた大地。 養分が吸い取られたかのように萎んでしまっている木々。 どんよりと曇り、時々雷鳴が轟いている空。

……うん、全く知らない場所です。 ていうか日本国内にこんな場所存在しないだろ。 どこぞの魔境じゃねーか！

「落ち着け……素数を数えるんだ……」

とか言いつつ手の平に「人」という字を何度も書いている俺。 い

やあ見事にテンパっておりますなー。(＊。＊)アハハハハノ  
ノノノノ、

・・・っていかんいかん。こんなときこそ冷静に行動しないと。

「えーと怪我は・・・してないな。持ち物は・・・」

幸いにも怪我はしていないようだ。学ランやズボンのポケットを  
探してみると、財布に携帯に学生証にボールペンにハンカチーフに  
・・・薄汚れた輪ゴム。

何で入ってるかなんて聞かないで。多分ポケットから出すの忘れ  
てそのまんまだっただけだから。

とりあえず輪ゴムは少し使用しただけでちぎれそうなので捨てて  
おいた。次に携帯の画面を見てみるが、まあ予想どおり圏外にな  
っていた。

「ハア・・・マジかよ・・・」

携帯を学ランの内ポケットに仕舞うと、俺は盛大にため息を吐い  
た。どうやら、本当に異世界に来てしまったらしい。原因は・・・  
・多分というより絶対にあの女の子だろう。手え光ってたし。

「一体ここはどこなんだ・・・？」

あまり地べたに座り続けていてもどうしようもないので、俺はズ  
ボンについた砂埃を払いながら立ち上がり、改め周辺に視線を向け  
る。

・・・相変わらずの生命活動に乏しい風景が広がっている。単  
に太陽の恵みが足りないだけでこうなったとはとても思えないほど  
にだ。

「何か生命活動を妨げる要因でもあんのかね？ こりゃ長居は禁物か」

そう結論すると、俺は歩き始めた。幸いにも、ここはどこかの山らしい。下山していけば少なくとも人の住む集落ぐらいいは見つけられるだろう。

「……こんなやばそうな山の麓に集落なんてあるのかどうかは分からんが。」

「……ん？」

ふと、何か聞きなれない音が聞こえたような気がして足を止める。何か生き物がいたのだろうかとかと周囲を見渡してみても、荒れ果てた山肌を間近に見れるだけ。俺と枯れ木以外の生命は発見できない。

「つかしいなあ……？ 空耳か？」

サ……バサ……

「……違うみたいだな」

今度のはつきりと聞き取れた。多分鳥の羽音だろう。俺はこんな山にもきちんと生物がいるんだなーと感心したところで……気づいた。

羽音が大き過ぎやしないか、と。

バサ……バサ……！

徐々に大きくなっていく羽音。もうこの時点で飛んでくるヤツが鳥類の可能性はゼロです。鷹だってこんなデケー羽音出さねーよ！！

だがちよつと待て。鳥じゃねーってんなら一体何が迫ってきてるんだ？

〈脳内会議開始〉

議長「諸君！ それでは第16578回目脳内会議を始めよう！！」  
議員A「議長！！ 正直に何回行ったか覚えてないって言ったらどうですか！！ 何その明らかに適当に数を揃えただけ感満載の回数  
は！？」

議長「ええいうるさい！！ どうせ作者も読者も深くは考えん！！  
適当にそれらしい数を言っておけばいいのだ！！」

議員A「全然それらしい数じゃないしメタ発言は自重しやがれえー  
————！！！！！！（バキイ！！）」

議長「ごぶはああ！！！！！！？？？」

議員A「ハアハア・・・それで、今回の議題は？」

議長「（人に右ストレートぶちこんでおいて平然としてる・・・恐ろしい！！）え、えーと『今迫ってきている生物の正体について』  
だ」

議員A「ああ、何かデカイ羽音が特徴のヤツね。ていうかコレぶつちやけ振り向けば一発で分かるんじゃないか？」

議長「まあ先に推察した方が心の準備ができて良いからな・・・  
では議員Aよ。今迫ってきている生物の正体は一体なんだと思っ  
ね？」

議員A「あー空飛んでこんな荒れ果てた山に住んで、んで普通の

鳥類よりデカイ生き物だろ？ そんなん存在するわけが……

議長「ん？ どうかしたかね？」

議員A「……正体、分かったかも」

議長「何！？ 本当か！？」

議員A「あーいや、やっぱこれは無いわ…… ありえないし……

」

議長「構わん、言ってみろ。 判断するのは私だ」

議員A「……ドラゴン」

議長「……嘘やん……」

（脳内会議終了）

「（ヤバイ……こいつあヤバイぜ……！！！！ まさかドラゴンなんてファンタジーな生き物があるなんて結論に達するとは……！！ でも何か納得せざるを得ない存在感を背後から感じている……！！！！）」

脳内を出た結論を必至で否定しようとするが、後ろから響いてくる羽音とソレに伴って発生する風。そしてなにより、今まで感じたことのない強大で圧倒的な存在感が俺を押しつぶそうとしているのだ。

ドスン……！！

俺のすぐ後ろに、何か重量感たっぷりの生き物が着地しました。



うわぁ地面にすんごく大きい影が出来てるよー（\*。。）アハ  
ハハハノ、ノ、ノ、ノ、

「後ろには何もいない後ろにはなににもいない後ろには……」

念仏のように呟きながら後ろを振り返ってみると、そこには……

フシュウ……

全長10メートルはあろうかという巨大な黒龍が、不機嫌そうに  
鼻息を吹いて俺を見つめていました。 予想的中。 ヒヤッハ！

「……あー……」

グルルル……

ドラゴンと目が合った俺は、そのまま硬直。 ぶっちゃけ蛇に睨  
まれたフロッグの心境をモロに味わう羽目になっております。 背  
中は汗でびっしょり。

互いに無言のままピクリとも動かずに見詰め合うこと10数秒。  
ドラゴンさんはもう一度鼻息を吐くと、くるりと俺に背を向けた。

「（助かった……？ これは見逃してくれたのか……？）」

助かったと思い、俺が安堵の息を吐こうとした瞬間。



滅茶苦茶どつでもいいことだった。

エピソード1：「食べても美味しくないですよ！」（後書き）

途中に出てきたのは主人公の脳内で行われた会議です

・・・手軽に行数が稼げるのでまたやるかも

エピソード2：「だから食べても美味しくないって!!」

「  
」

「（話し声が・・・聞こえる・・・。頬に当たるこのゴツゴツしたものは・・・地面か？ 何で俺は地面に寝転がって・・・？）  
」

朦朧とする意識を何とか手繰り寄せ、必至に自分が置かれている状況を把握しようと努力する。 ええと・・・確か俺は不良から助けた女の子の所為でどっか見知らぬ土地に連れてかれて・・・それから・・・それから・・・。。。。。。あ。

「お鍋でコトコト煮込まれるー！ー！ー！?!?!?!?!?」

ドラゴンに拉致られたことを思い出して勢い良く立ち上がる。  
いやドラゴンは鍋なんて使わないだろうが。

起き上がって最初に見えたものは、こちらに背骨に沿って生えているトゲと巨大な羽が目立つドラゴンさんの背と、滅茶苦茶鬱陶しそうに目を細めているドラゴンさんの目でした。

そうですねー突然こんな近くで他人に騒がれたら迷惑ですよねー。 殺気だつて無言の圧力だつて放っちゃいますよねー。

わーコレは死んだ俺ー。（\*。。）アハハハノ、ノ、ノ、

『・・・・・・・・（ジ〜〜）  
』  
「・・・・・・・・ん？」

思わず意識を天空の彼方にトバしていたら、ふとドラゴンさんの

ものとは別の視線に気づいた。アレ、他にも誰かいるのか？ もしかしてご夫婦？ それとも俺と同じく美味しく頂かれる羽目になった人？

適当な考えを巡らしながら視線の正体を探してみると、ドラゴンさんの後ろに隠れて俺を見つめてくる俺と同じぐらいの背丈のちびドラゴンを発見。どうやら俺が感じていた視線の正体はコイツだったようだ。

『……………』（じ〜〜〜）  
「……………」

……………何か視線がきになってしゃーないんですが。何あの好奇心たっぷりの瞳。

『……………』（じ〜〜〜）  
「……………」

このまま見つめられても困るので、なんかアクションを起こしてみること。」

・コマンド

闘う

話す

キれる

手を振る

とりあえず手を振ってみた。

「……………」（フリフリ）  
『!?!? シャギャー!?!?』

おお、何か予想外に派手な反応が返ってきた。これは喜ばれているのか？ だったらいいんだが……。

『……何をしている』

「ヒイ！？ 圧力が！！ 圧力が増してるう！！！！」

おかしー！！ とてもフレンドリーなアクションだったのに体に突き刺さる殺気の密度がさらに濃くなっている！！ ていうか今喋ったの誰！？ 俺以外に人間いたの！？

「ど、どちらサマで！？」

『目の前にいるだろうが』

「え……」

目の前にいるモノっていったら……ドラゴンさんで？

「ええええ！？ アンタ喋れたのー！！????」

『……貴様はどうやら早急に食われないようだな……』

おおっと浴びせられる殺気の量が增量しやがったあ。 気を抜いたら気絶しそうだあ。これは大変だあ！ 今すぐ食われても何も言えねー！（恐怖で錯乱中）

不機嫌そうに目を細めて俺を睨んでくるドラゴンさん。 このままなんの下準備もなく踊り食いされる運命。俺はそう諦めていた。けれど、次の瞬間に起きた出来事のお陰で、俺は助かることになる。

『……キュウウウ……』

先ほどのちびドラゴンが、弱々しい声で泣き声を上げてズシンと

倒れたのだ。 え？ 何どうしたの？

どうやらドラゴンさんにとっても予想外のことだったらしい。すぐさま首をちびドラゴンの方へ向けると、悲痛な声を上げながら介抱し始める。

『ヨイス！？ 大丈夫かヨイス！？』

『キユウウ・・・』

ドラゴンさんの必死の呼びかけに応えようとしたちびドラゴンだが、弱々しい泣き声しか上げられない。 それは逆に親であるドラゴンさんの不安を押し上げてしまう。

『しつかりしろ！！ 今助けてやるからな！？』

そう言うと、ドラゴンさんはちびドラゴンに向けて、口から青白い霧状の何かを吐き出してちびドラゴンへと吹きかけていく。

普通なら一体何が行われているのか分からないだろう。 だが、俺にはあの青白い霧の正体が何なのか、右腕の力によって感覚で理解できていた。

「（アレは・・・自身の生命エネルギーを分け与えてるのか？

けど、一度にあんな大量の生命エネルギーを失っちまったら・・・）

休むことなく生命エネルギーを与える続けるドラゴンさんを見ていて、俺のは嫌な予感を抱いていた。 そして、その危惧は見事な中でした。

『ぐ・・・』



ちびドラゴンに生命エネルギーを与え続けたドラゴンさんは。ゆつくりと横向きに倒れた。やはり疲労がでかかったらしい。

俺は自分が食われそうだったということも忘れて、ドラゴンの傍に近寄った。

「お、おい大丈夫かよ!？」

「! 近寄るな!！」

ドラゴンさんは俺のことを警戒していたようで、怒鳴り声とともに巨大な尻尾が俺の頭目掛けて振るわれた。しかも尻尾のトゲがきちんとかち向いてる……って死ぬわー!ー!?

「のおお!？」

俺は急いで上体を後ろに反らして……俗に言う『マトリックス避け』で見事に尻尾を回避。顔のすぐ前を、俺の胴体ぐらいの太さの尻尾が唸りを上げて通り過ぎていった。危ねえええ!ー!ー!

「ちょ、タンマ!ー! 様子見るだけだから!ー! なんもしないから!ー!」

『黙れ!ー! 人間の言うことなぞ信じられるか!ー!』

避けた勢いそのままに尻餅をついた俺は両手を前にかざして何とか説得を試みるが、疲労がでかくて判断力が鈍ってきているドラゴンさんは全く意に介さず、もう一撃かまそつと尻尾を構え出す。

「わああちょちょ待った待った待って!ー!??? そんなん食らったらいくらなんでもやばいからあ!ー! 俺絶対一撃死するからあ!ー!」

『問答無用!ー!』

「ちょっとぐらい躊躇ってー!? 何この理不尽なボス戦はー!？」

思わず絶叫している俺には全く構うことなく、先ほどよりもやや斜めの軌道で尻尾を繰り出してきた。多分さっきの避け方をしたら酷い目に遭うだろう。仕方なく、俺は本気を出すことにした。

(“クロ”、頼んだ!！)

心の中でそう叫んだ瞬間、俺は全身に不可視の力が染み渡るような感覚を感じ、気がつくと俺は思い切りジャンプをして尻尾を回避していた。

『な!?!』

ドラゴンさんの驚く声が聞こえる。それもそうだろう。俺は信じられない速度で跳躍して、10m近くまで飛び上がっているのだ。少なくとも、普通の人間はこんなことはできないだろう。

俺は空中で体勢を変えるとそのまま地面へと無事に着地。いつでも反応できるよう体をリラックスさせながら、油断無くドラゴンさんへ目を向ける。ドラゴンさんは急に雰囲気が変わりだした俺を、憎々しげに睨み付けながら、呻くように呟く。

『貴様・・・“魔術師”だったか!！』

「・・・そんな大したものじゃない」

俺はゆっくりと右腕を上げていき、真っ直ぐ水平になったところで止める。そして、左手で学ランの袖をずらしていく。

袖から現れた右腕には、まるで腕に絡みついているような黒き龍の入れ墨が刻まれていた。

「俺はただの・・・」

突然、腕の龍の入れ墨が“腕を動かしていないにも関わらず”動き出した。まるで滑るように、皮膚の下にでも潜んでいたかのよう滑らかに腕を這いずり回る龍の入れ墨を、ドラゴンさんがその巨大な眼を驚愕に見開いて見つめている。

『何だと・・・!?!?』

入れ墨だと思われていた龍は動きを止めると、ゆっくりとその鎌首が腕から剥がれていく。やがて、1mほど腕から剥がれると、入れ墨だったはずのモノは、しっかりとした質量を持った龍の首へと変化していた。

『バカな・・・【封龍】だと!?!?』  
古龍一角エイシエン ト フラゴンが何故人間に憑いているのだ!?!?』

「・・・お前そう言うヤツだったの?」

なにやら始めて聞く単語に思わず腕の龍

通称クロ

に尋ねると、俺の方を向いて頷いてくれた。クロは話すことはできないがしっかりとした自我を持っているため、このように動作で返答を返すのだ。

「なんかかなり凄いヤツだったみたいだなお前・・・ まあどうでもいいけど」

『・・・貴様・・・一体何者なのだ・・・?』

搾り出すように呟かれたその言葉に、俺はにやりと笑ってこう答えた。

「ただの【禍喰らい】だよ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1201i/>

---

禍食らい～Eating of the Disaster～

2010年10月10日02時46分発行